

副詞の歴史的変遷

——現代英語から Shakespeare の英語, Spenser の英語,
Chaucer の英語, そして古英語まで——

野 原 康 弘

は じ め に

この論文では、現代英語から、現代英語初期の William Shakespeare の英語（16世紀後半から17世紀初期）、ほぼ同時代の Edmund Spenser の英語（16世紀後半）へと時代を遡り、最後に Geoffrey Chaucer の英語（14世紀）および古英語（Old English: OE）を参照しながら、副詞の形態や用法上の問題点に焦点を当ててみようと考えている。

英語の副詞を分類する場合、形態上、意味上、機能上のどれを基準にするかによって大きく変わってくる。機能上からすれば、下記の3種類に分類されるであろう（Sweet を参照）が、ここでは分類することが目的ではないので簡単に示すだけに留める。

- ① 独立副詞 (Independent adverb) : absolutely, indeed, soon, etc.
- ② 疑問副詞 (Interrogative adverb) : where, when, how, etc.
- ③ 接続副詞 (Conjunctive adverb) : where, when, how, why, etc.

これら3種類の中でも、この論文では特に、①「独立副詞」だけに注目し、その使用と形態の発達過程を中心に調べていきたいと思う。

1. 現代英語における副詞

現代英語における副詞の最も一般的な形は、absolutely のように、absolute という形容詞に -ly という接尾辞を付加したものである。しかしながら、副詞の中にはこの接尾辞を持たないものも見られる。語形上、副詞をもっと詳しく調べてみると、大きく2種類に分類される。一つは、本来の（他の品詞からの派生されたものでなく、単独で用いられる）副詞であり、「一次的副詞（primary adverb）」と呼ばれるものと、もう一つは、他の品詞からの転用や派生によって形成された副詞、「二次的副詞（secondary adverb）」と呼ばれるものである。

① 一次的副詞：以下に示されたように分類される。

- a) 程度：enough, little, so, still, quite, very, much, etc.
- b) 場所：above, down, far, here, in, near, out, over, etc.
- c) 時：just, now, since, then, etc.
- d) 様態：so, well, etc.
- e) 文：indeed, maybe, etc.

この中には、副詞以外の品詞、接続詞や前置詞として使用されるものも多い。After を例に挙げてみよう。

- (1) They lived happily ever **after**¹. (副詞)
Cf. They lived happily ever **afterward(s)**.
- (2) He arrived **after** you had left. (接続詞)
- (3) Come home straight **after** the concert. (前置詞)

② 二次的副詞：この副詞は以下のように6種類に分類される。

- 1. 接尾辞 -ly が付加されて副詞として機能するもので、一般的な副詞。
 - a) 「形容詞+**-ly**」：abruptly, absently, accurately, etc.

副詞の歴史的変遷

- b) 「現在分詞＋-ly」: cunningly, exceedingly, surpassingly, etc.
- c) 「過去分詞＋-ly」: assuredly, excitedly, supposedly, etc.
- d) 「名詞＋-ly」: namely, partly, purposely, yearly, etc.

2. 「形容詞と同形の副詞」: 形容詞の形がそのまま副詞としても使用されるもので、一般に Flat adverb と呼ばれている。機能的にも形容詞としても副詞としても使用される。

Ajar, early, fast, half, hard, long, straight, etc.

(4) We each have **half** ownership. (形容詞)

(5) Don't leave your homework **half** done. (副詞)

3. 「2重形(2種類の形)をもつ副詞」: 基本的には同一の語が, 「-ly の接尾辞をもつ副詞」と「-ly の接尾辞をもたない副詞」の両形をもつ現象のことである。

Barely : bare, closely : close, deadly : dead dearly : dear,
hardly : hard, highly : high, lately : late, nearly : near,
presently : present, scarcely : scarce, sharply : sharp,
widely : wide, etc.

(6) He has **nearly** finished his meal.

(7) Come **near** and see for yourself.

例文(6) nearly (=almost) と例文(7) near (=close) を比べてみるとはっきり分かるように, 2重形をもつこの種の副詞は, 両者の意味が大きく違うか, あるいは全く異なるものが多い。

4. 「副詞的属格」：古英語（Old English＝OE）では、名詞の属格は普通 -s 語尾が付加されて、副詞的にも、あるいは副詞としても使用されてきた。例えば OE nihtes（＝by night）がそうである。以下の語は、今日の英語に属格語尾の名残りを留め、副詞として使用されている。

Always, besides, forwards, hereabouts, needs, nowadays,
once², overseas, sometimes, unawares, etc.

5. 「副詞的対格」：例文(8)や例文(9)に見られるように、副詞的に用いられる対格形の名詞（句）のことである。古英語では名詞の対格がしばしば副詞的に用いられたことに由来している。

(8) I was walking **London streets**.

(9) I ran **full speed** for shelter.

6. 「複合副詞」：2 個以上の語の結合によってつくられた副詞。下記のようにいくつかの代表的な組み合わせがある。

a. **-about(s)**

hereabout(s), rightabout, thereabout(s), whereabout(s) etc.

b. **-after**

hereafter, hereinafter, thereafter, thereinafter, whereafter, etc.

c. **-days**

holidays, heavenly-days, Mondays, nowadays, etc.

d. **-like**

doglike, motherlike, etc.

e. **-style**

alpine-style, familystyle, freestyle, etc.

f. -times

betimes, betweentimes, oftentimes, oftentimes, sometimes,
daytimes, etc.

g. -wards

afterwards, backwards, headwards, hencewards, homewards,
straightwards, towards, etc.

h. -ways

broadways, crossways, hereaways, noways, twoways, etc.

i. -wise

clockwise, likewise, otherwise, crosswise, etc.

j. その他

downstairs, nevertheless, outdoors, parrot-fashion, etc.

この章では、現代英語における副詞の使用と形態の両方について、特徴を述べてきたが、つぎの2章では、現代英語の副詞の問題点を探っていきたいと考えている。

2. 現代英語の副詞に関する疑問

現代英語における副詞の使用について調べていくと、副詞の形と意味に疑問が生ずることがある。

(10) She rebuked me very **sharply**.

上の例文における **sharply** は、「厳しく、鋭く」という意味をもつ副詞であることは一目瞭然である。それに対して、つぎの文はどうであろうか。

(11) School begins at nine **sharp**.

この文の sharp は、形の上では形容詞 sharp と同じであるが、‘punctually’ 「(9時) きっかりに」という意味を表す、これも歴然たる副詞である。例文(10)と例文(11)は、意味がまったく違うために、わざわざ異なった形をもったのであろうか。つぎの2つの例文を比較してみよう。

(12) The path turned **sharply** to the right.

(13) The car stopped **sharp**.

両方の例文とも、日本語の「急に」という同じ意味を表しているように思われる。果たしてそうだろうか。意味をもう少し詳細に調べてみると、例文(12)の sharply は「角度が鋭く」で、例文(13)の sharp は「突然」と、異なった意味を表していることが分かる。*The Macquarie Dictionary* によれば、sharp は、副詞として ‘acutely, keenly, abruptly, suddenly, punctually, vigilantly, briskly, quickly’ などの強調の意味をもっているとある。これらの意味は、sharply という副詞には見られないものである。

果たして、他の語の場合はどうであろうか。Cleanly と clean について比較してみよう。

(14) The cottage was **clean** and tidy.

(15) I **clean** forgot to call her.

(16) This knife cuts very **cleanly**.

(17) The Japanese are a **cleanly** people.

例文(14)の clean は、当然だが形容詞。

例文(15)の clean は、形こそ例文(14)の clean と同じだが、この clean という語がもっている本来の属性ではなく、「すっかり」という意味の副詞であり、ここでは completely に置き換えることができる。というのは、clean は副詞として ‘cleanly, wholly, completely, quite’ の意味をもっているからで

ある (*The Macquarie Dictionary*, p. 336)。

例文(16)の *cleanly* は、「見事に、ちゃんと」という意味の副詞。

例文(17)の *cleanly* は、形は例文(16)の *cleanly* と同じであるが、「清潔な(国民)」という意味の形容詞。形容詞の中には、「名詞+*-ly*」や「形容詞+*-ly*」という形をもつものが少なからず存在する。

「名詞+*-ly*」

brotherly, daily, friendly, homely, manly, monthly, etc.

「形容詞+*-ly*」

deadly, elderly, goodly, kindly, lively, lowly, poorly, etc.

これらを見てきただけでも、「副詞」と「形容詞」は、非常に密接な関係にあることが分かる。

以下の例のように、ほとんど同じ意味を表すのに、*-ly* 接尾辞をもつ副詞と *-ly* 接尾辞をもたない副詞(形態上は形容詞)が使用されることがある。

(18) The sun shines **brightly**.

(19) The sun shines **bright**.

例文(18)の *brightly* と例文(19)の *bright* との間にそれほどの違いは見出せない。*The Macquarie Dictionary* の *bright* のところには、形容詞の意味の他に副詞として ‘in a bright manner; brightly’ の意味を挙げているだけである。この点で、上の例文(11)や(13)の *sharp* とも、例文(15)の *clean* とも違うのである。この違いはどこにあるのだろうか。

さらに、現代英語において、自動詞として機能している動詞の中には、例えば *appear, feel, get, keep, look, smell, sound, taste* などのように「補語」として形容詞を必要とするものがある。ここで、Yasui *et al.* (1976) が挙げている例を参照しよう。

(20) The train appeared **slow**.

(21) The boys looked **eager**.

例文はそれぞれ、「その列車は遅いように思われた」、「その少年たちは熱心そうに見えた」という意味で、例文(20)の *slow* も例文(21)の *eager* も形容詞で「補語」である。これに対して、副詞がくる例も挙げている。

(22) The train appeared **slowly**.

(23) The boys looked **eagerly**.

これら2つの例に対してそれぞれ、「その列車はゆっくりと現われた」、「その少年たちは熱心に見ていた」という意味が与えられており、*slowly* も *eagerly* も副詞であり「補語」ではないことを示唆している。すなわち例文(20)と例文(21)の動詞は補語を必要とする「不完全自動詞」であるのに対して、例文(22)と例文(23)の動詞は補語を必要としない「完全自動詞」であるために、例文(20)、例文(21)と例文(22)、例文(23)がまったく違う意味をもっている、すなわち同じ動詞ではあるが動詞自体に意味の違いがあると主張している。

確かに、Yasui *et al.* の主張は理解できるが、下の例の場合どうなのだろうか。両者にそのような動詞自体の意味の違いが存在するのであろうか。

(24) This meat smells **violent**.

(25) This meat smells **violently**.

例文(24)において、*violent* は形容詞でありかつ「補語」であり、「この肉はひどく臭う」を意味し、この種の動詞類のごく一般的な文型である。しかし、形容詞の代わりに副詞が使われているのが、例文(25)であり、*violently* は副詞ではあるが形容詞的な役目を果たし、「補語」としてみなされる。例文

副詞の歴史的変遷

(24)は単に「ひどい臭いがする」という意味だけであるが、副詞を使った例文(25)は「(ひどい臭いがして)臭くてたまらない」という意味合いをもっている (*Random House English-Japanese Dictionary*, p. 2443.)。すなわち、例文(24)の *violently* には *violent* の場合よりはるかに強調された意味が付加されていることになる。

副詞の形容詞的用法：形容詞的用法に用いられる副詞には、「場所」を表す副詞、「方向」を表す副詞、「時」を表す副詞などがある (Yasui *et al.* pp. 9-11.)。

- ① 場所：a **nearby** building, the **upstairs** neighbor, etc.
- ② 方向：his **downward** progress, your **home** return, etc.
- ③ 時：the **then** president, the **yesterday** meeting, etc.
- ④ 程度：**quite** some player, **such** a (funny) story,
rather a fool, etc.

「場所」、「方向」、「時」を表す副詞のこの用法は、以下のように副詞が後置される場合もある。

The neighbor **upstairs**, his progress **downward**, the president **then**

逆に、「程度」を表すこの種の副詞は、後置できない。

*Some player **quite**, a (funny) story **such**, a fool **rather**

以上、形容詞が副詞として機能したり、逆に副詞が形容詞として機能したりしている例を見てきたわけであるが、両者は非常に密接な関係にある反面、はっきりとした相違点があることも事実である。言語としての「英語」の歴史を遡りながら、それらを明らかにしていきたいと考えている。まずは、

Shakespeare の英語から始めることにする。

3. Shakespeare の英語における副詞

「副詞の領域では、語材として存するものが、シェイクスピア時代以来、著しく変わった。多くの副詞がその時以来廃れ、通語には文語でも口語でも縁遠いものとなり、そして今日では、ただ古風な英語、および詩に属するか、または方言になお生き残っているのみである。」と述べているのは、Shakespeare の英語における権威ある研究者、W. Franz である。

Franz が言う「...ただ古風な英語、および詩に属するか、または方言」の他に、「ことわざ」にも生き残っている⁴。

(26) Still waters run **deep**.

2章で見た例文(19)の **bright** の使用が Franz が言う「古風な英語」であるのだろうか。確かに、現代英語では **brightly** の方が文法的であり、より好まれるわけであるが、Shakespeare の時代には、下の例のように **bright** の方がもっと頻繁に使用されていた。

(27) The moon shines **bright**.

——*The Merchant of Venice*, V. i. 1.

ところで、例文(27)の **bright** と同じように一見、形容詞であるように見えるが、実際は副詞的に機能している例を挙げてみる。これも Shakespeare では頻繁に登場するものである。

(28) I am **marvelous** hairy about the face.

——*A Midsummer-Night's Dream*, IV. i. 26.

副詞の歴史的変遷

この例文の marvelous が bright と違う点は、現代英語において、bright が **brightly** に置き換えられる、むしろ置き換えられる方が好ましいのに対して、ここでの marvelous は、意味的にみて **marvelously** に置き換えられないところである。というのは、この marvelous は、「不思議にも、素晴らしく」という marvelous 自体がもっている本来の意味ではなく、‘extraordinarily’（「非常に、本当に」）の意味で使用されているからである。したがって、marvelously ではなく、例えば、exceedingly や really などの強意副詞に置き換えた方が、意味的には同じになる点に注目し値する。例文(11)の sharp が punctually と、また、例文(13)の sharp が suddenly に、さらに例文(15)で述べた clean が completely という強意副詞とそれぞれ置換できるのと同じである。

The Oxford English Dictionary (OED (vol. VI. p. 196))によれば、marvelous がこのように副詞として使われるのは、14世紀から18世紀にかけてであり、それ以降は、-ly 接尾辞をもつ副詞が代わりに使われることになる。

この点について、もう少し詳細に調べていくと、Shakespeare では、つぎのような形容詞や現在分詞は（そのままの形で）強意の副詞として使用されている例が多いことが分かる (Franz, pp. 552-561, Otsuka, pp. 123-4)。

形容詞の例

Clean (=quite, entirely), excellent (=extremely), full (=completely),
great (=greatly), monstrous (=very), right (=highly),
sore (=violently), sound (=very much), wondrous (=very)

現在分詞の例

Exceeding (=very), passing (=exceedingly)

また、-ly を接尾辞にもつ副詞の中にも、今日の用法と違い、Shakespeare の時代には、強意副詞として用いられたものもある (Franz, pp. 552-561, Otsuka, p. 124)。

Clearly (=completely), cruelly (=extremely), dearly (=very),
mainly (=very), fully (=completely), hugely (=mightily),
merely (=quite), shrewdly (=very much), soundly (=very),
thoroughly (=thoroughly)

前の2章の例文(20)～(25)で検討してきた「**look, smell, etc.**＋形容詞」と「**look, smell, etc.**＋副詞」は Shakespeare でも見られる。特に副詞が後置される場合は、violently のように意味が強められるときである。

(29) Why, how now, Hecate! You look **angrily** (=angrily).

——*Macbeth*, III. v. 1.

Otsuka (pp. 26-27.) によれば、2 個の副詞が対になって登場する、一種の群副詞 (group adverb) がよく見られた。ただしその場合、Shakespeare では、前後どちらかの副詞が形態上は、形容詞の形をとるのが普通だった。

(30) Good gentlemen, look **fresh and merrily**.

——*Julius Caesar*, II. i. 224.

(31) His grace looks **cherfully and smooth** to-day.

——*The Tragedy of King Richard III*. III. iv. 50.

現代英語では逆に、どちらか（両方とも -ly 接尾辞をもつか、両方とももたないか）に揃えるのが一般的である。いずれにせよ、このように副詞を対にして2個登場させることにより、意味を強める狙いがあったと考えられる⁵。

2章に登場した「副詞の形容詞的用法」は、Shakespeare でもすでに使用されていた。

副詞の歴史的変遷

- (32) Beyond the marke of others: our **then** Dictator,
——*Coriolanus*. II. ii. 89.
- (33) Good **sometimes** queen, prepare thee hence for France.
——*The Tragedy of King Richard II*. V. i. 37.

この章のこれ以降は、Shakespeare の英語の副詞に関する特徴を列挙していくことにする。

- ① 名詞 something は ‘somewhat’ 意味で、緩和副詞 (down-toner) としてよく使用された。

- (34) These foolish drops do **something** drown my manly spirit.
——*The Merchant of Venice*, II. iii. 14.

また nothing を ‘not ...at all’ の意味で、強意の副詞として使用するのも、普通であった。

- (35) That you do love me, I am **nothing** jealous.
——*Julius Caesar*, I. ii. 162.

これら something や nothing の用法はそれぞれ現代英語にも受け継がれている。

- (36) She **something** resembled her own uncle.
- (37) He cares **nothing** for luxuries of life.
——*Random House English-Japanese Dictionary*

さらに、現代英語の話しことばにおいては、something が ‘somewhat’ の意

味ではなく、「大いに、すごく」という強調された意味でも使用されている。

(38) He took on **something** fierce about my tardiness.

——*Ibid.*

② 1章の6で取り上げた2個以上の語の結合によって造られた複合副詞は、「-s が付加された形」(always, backwards, hereabouts, sometimes, etc.) も、「-s が付加されない形」(alway, backward, hereabout, sometime, etc.) も、両方とも同じように使用されていた。——Otsuka, p. 121.

③ hardly は ‘vigorously’ や ‘with difficulty’ の意味で普通に使用されていた。Shakespeare 以後も、18世紀までは普通に通用していた。

(39) I was **hardly** moved to come to thee.

——*Coriolanus*. V. ii. 78.

このような hardly の用法は、Shakespeare 以後も18世紀までは普通に通用していた。もちろん、現代英語において、hardly がこの意味で用いられないことはないが（下の例のように）、非常にまれである。

(40) Our victory was **hardly** won. (=with trouble)

——*Random House English-Japanese Dictionary*

事実、19世紀に入るとこの意味での hardly は hard に取って代われ、その後あまり使用されなくなる。OED で調べみても、1818年の例が最後のものになっている (OED, vol. V. p. 89.)⁶。

④ ‘Perhaps’ の意味で haply や happily が使用された (happily は haply

の異形と考えられる)。

- (41) That the soul of our grandam might **haply** inhabit a bird.

——*Twelfth-Night*. IV. ii. 50.

- (42) **Happily** you may catch her in the sea;

——*Titus Andronicus*. IV. iii. 8.

しかし、現代英語では、両者ともまったく使用されていない。

- ⑤ 現代英語では、まれになってしまった強意副詞の例。

Even が ‘just’, jump が ‘exactly’, out が ‘thoroughly’, roundly が ‘straightforwardly’ の意味でそれぞれ使用されていた。

- ⑥ 現代英語で接続詞や前置詞として使用されている。

Against, amidst, amongst, whilst など現代英語で -st 語尾をもつのが普通であるものが、Shakespeare では、それぞれ againes, amides, amonges, whiles のように、-es 語尾をもち、副詞として使用されていた。現代英語の against, amidst, amongst, whilst などの語尾 -t が添加されたのは、おそらく、最上級 -est の影響などによるものと考えられる。

以上が、Shakespeare の英語の副詞に関する特徴である。現代英語の副詞の用法がいろいろな形で Shakespeare の英語の中に見られることが分かる。それは、Shakespeare の英語が現代英語へどれほど大きく影響したかを物語っている。それは、ほぼ同時代の Spenser の英語の影響を調べるとよく分かる。

4. Spenser の英語における副詞

Sugden は、「英語史の如何なる時期にあっても強意副詞は存在し、その

時代の流行的な考えや表現の趣向などによって支配されがちであった。それで英語の speech における強意副詞は、世代から世代にかけて相当に動揺している。」と述べて、強意副詞に関しては、Spenser の使用していたものと現代英語のものとはもちろん、Shakespeare のものともかなり違っていることに注目している。

確かに、Shakespeare (1564-1616) の英語と Spenser (1552?-1599) の英語は、時代的にはほとんど違わないが、副詞の使用や形態については、かなりの違いが見られる。

例えば、Shakespeare で、‘somewhat’ の意味で頻繁に使用された something は、Spenser ではほとんど見られない。これは、Spenser がこの意味ではそのまま somewhat を使用しているからであろう。

(43) **Somewhat** sad and solemn⁷.

——*Faerie Queene*. II. 9. 36.

OED (vol. X. p.415.) においては、副詞としての something の最初の例は1275年のものである。

(44) Al so he **piderward sumping** neyhleyte,
He sende his apostles by-voren.

——*OED*. vol. X. p. 415.

OED には1275年以来1510年まで、something のこの用法の例は掲載されていない。13世紀の最初の例は動詞を修飾するものであるが、一般的に16世紀以降は、形容詞の修飾はもちろん、時、場所、程度などを表す副詞やさらには以下の例のように前置詞句を修飾する機能をもつようになり、現代英語まで受け継がれている。

- (45) It was ...built **something** in the Moorish taste.

——*Ibid.*

それに対して、‘not ...at all’ の意味で使用された nothing は Spenser でもしばしば使用されている。

- (45) He was **nothing** valorous.

——*Faerie Queene*. V. 6. 32.

2章と3章で扱った look や smell のように、現代英語では後に形容詞を補語としてとるのが普通である動詞は、下の例文(47)のように、Spenser でもよく見られた。この sweete は、-e という副詞接尾辞をもっているの
で、副詞と判断するの方がよいと思われる。

- (47) Smelling **sweete**.

——*Ibid.* II. 6. 12.

これに対し、このような動詞がはっきりと分かる副詞と結びついている例も見出される (Sugden, p. 131.)。

- (48) Whenas he **greedily** did looke.

——*Ibid.* II. 9. 60.

このような例が Shakespeare でも見出される (例文(29), (30), (31)) ということは、16世紀後半の時代には、この用法は少なくとも一般的であったと言える。この場合、副詞が「補語」として形容詞の代わりに使用されてもかまわないということを意味しており、副詞と形容詞の密接な関係と同時に、副詞と形容詞の区別が曖昧な状態が伺われる。

Spenser の強意副詞に関しては、Shakespeare と同じように Flat adverb の使用がかなり多い。

All (=entirely), clean (=quite), far (=very), full (=very),
much (=very), right (=highly), sore⁷ (=grievously), etc.

しかし、Shakespeare でよく使用されていた強意副詞のほとんどが Spenser では使用されていないという事実は、強意副詞の使用は時代や作家の好みに大きく関係するという Sugden の主張を裏付けている。

同じように副詞的に使用された extreme は Spenser でも Shakespeare でも用いられていないが、他の作家（例えば、F. Bacon や B. Jonson）はよく使用している（Araki & Ukaji. p. 499.）。

現在分詞が強意副詞として使用されているのも、Shakespeare と同じである。

Exceeding (=exceedingly), passing(=surpassing, exceedingly, very)

上の2語が強意副詞として使用されるのは、現代英語では廃れている（*The Macquarie Dictionary*, p. 605 & p. 1297）が、話し言葉においては、“exceeding good” などと使われたりする。同じように、話し言葉においては、他の現在分詞が強意副詞として使われている。

(49) It is **burning** hot today.

(50) The weather was **freezing** cold.

——*Random House English-Japanese Dictionary*

もちろん、それぞれ burningly や freezingly の方が、文法的な面から見ると受け入れやすいのは確かである。

副詞の歴史的変遷

さらに、1章の②二次的副詞の1. b) で扱った「現在分詞+ly」の強意副詞は、Spenser でもうすでに使用されていた。

Dearly, exceedingly, thoroughly, etc.

最初の2語, dearly と exceedingly は, ‘very’ の意味で現代英語でも使用されている (もちろん, 古い感じはするが)。最後の語, thoroughly は, Spenser では, ‘completely’ の意味で使用されていたが, 現代英語ではもはや全くの古語になってしまっている。OED (vol. XI. p. 375.) は, thoroughly の強意副詞としての最後の例として, 1885年のものを掲載している。

(51) Hooper, ...swept his unfortunate garner so **thoroughly**.

Shakespeare で見られた一種の群副詞は, まったく同じような形で Spenser でも見られる (Araki & Ukaji. p. 493-4.)。

(52) And charged him so **fierce and furiously**.

——*Faerie Queene*. VI. 5. 16.

Flat adverb と -ly adverb が共存している原因を探るために, つぎにもうひとつ時代を遡り, それより約200年前の Chaucer の英語における副詞を調べてみることにする。

5. Chaucer の英語における副詞

Shakespeare や Spenser などが活躍した16世紀から今日までの400年余りの間, 文法形式に限っていえば, 英語はほとんど変わっていないと言える。しかし, その16世紀から約200年間遡り, Chaucer や Sir John Gower (1330?-1408?) などが活躍した14世紀との間には, 多くの点で違いがみられる。

一つ違いを挙げてみると、三人称単数語尾の違いである。Chaucer の時代には、わずかの例外を除いて、-(e)th (he liveth / he walketh) が圧倒的だったのに対して、Shakespeare の時代になると、明らかに北部方言の影響を受けた、-s (he lives / he walks) に変わり、それが一般化していく⁸。

このことは、副詞についても同じで、大きな違いが見られる。

Chaucer の時代における副詞は、以下に示すように4種類の副詞的語尾をもつものが一般的である。

- ① -e 接尾辞の付加 : 「形容詞+-e」
- ② -ly 接尾辞の付加 : 「形容詞+-ly」
- ③ -liche/-lice 接尾辞の付加 : 「形容詞+-liche/-lice」
- ④ -e 接尾辞の脱落 : ①や③で生じた副詞から -e 接尾辞の脱落

これからこれら4種類の副詞をそれぞれ詳しく見ていくことにするが、4種類の中でも最もよく見られたのが、①の -e 接尾辞をもつ副詞である。

① 「形容詞+-e (副詞接尾辞)」の形態をもつ副詞

Chaucer より以前の古英語から使用されてきた形である。

(53) But right as whan the sonne shyneth **brighte**.

——*Troilus and Criseyde*, 2. 764.

(54) The moone, whan it was nyght, ful **brighte** shoon

——*The Miller's Tale*, 1. 3352.

② 「形容詞+-ly (副詞接尾辞)」の形態をもつ副詞

Chaucer では、①のタイプについてよく見られる形で、Spenser や Shakespeare を経て、現代英語まで使用されている。

- (55) That Cristes Gospel **trewely** wolde preche:

——*General Prologue*, l. 481.

- (56) **Truly** he shall repente it sore,

——*The Romaunt of the Rose*, l. 3476.

③「形容詞＋**-liche/-lice** (副詞接尾辞)」の形態をもつ副詞

この種の副詞は元々、「名詞＋**-lich/-lic** (形容詞接尾辞)」でできた形容詞 (例えば, OE *luf(u)+lic=luflic*) から生じたものである。この種の形容詞は古英語にすでに存在したタイプで, Chaucer でも, **-lich** の接尾辞をもつものが普通に見られる。

- (57) Counseilest me that **siklich** I me fine,

——*Troilus and Criseyde*, II. 1528.

この種の形容詞にさらに副詞語尾 **-e** を付加してつくられた副詞である。例えば, ‘freondlic’ という語にさらに **-e** を付加して *frendlice* が造られ, ‘in a friendly manner’ を意味していた。

ところが, 時がたつにつれて, **-lice** という語尾自体が独立し ‘in a ... manner’ という意味をもち始め, 自由にいろいろな形容詞と結びついて副詞を造っていった (Geist, p. 169.)。

slāw + *lice* = *slāwlice* > ModE *slowly*

eornost + *lice* = *eornostlice* > ModE *earnestly*

そのために, この **-lice** (Chaucer では **-liche**) という副詞接尾辞をもつ副詞が Chaucer でもよくみられる理由の一つである。

- (58) And **treweliche** it sit wel to be so;

——*Troilus and Criseyde*, I. 246.

しかし、後者③のタイプは、Spenser や Shakespeare ではほとんど見られなくなっているのに、Chaucer の時代から彼らの時代へ移行していく間に消失してしまったようである。OED で *treweliche* の例を調べても、1400年以降の例は見出せないが、一つの文に *trewely* と *treweliche* の両方が共存している例 (1362. W. Langland. *Piers the Plowman*) を載せている。

- (59) Bote þe liuen trewely and eke loue þe pore, And such good
as God sent Treweliche parten.

——OED. Vol. XI. p. 420.

それに対して、①のタイプは、Spenser や Shakespeare の頃には、副詞語尾 *-e* を失い、まったくの flat adverb として生き残り、一方、②の *-ly* 付加のタイプは、Chaucer から Spenser や Shakespeare、さらには現代英語まで、そのままの形で受け継がれてきたわけである。

④ ①や③でつくられた副詞から副詞接尾辞 *-e* が脱落した副詞

副詞接尾辞 *-e* をもたないこのタイプの副詞は、例文(46)や例文(47)に見られる *brighte* の *-e* が無くなり *bright* になってしまい、形態上は形容詞の *bright* と区別がつかなくなってしまうということである。Sandved (pp. 55-56.) が主張しているように、副詞か形容詞かの判断が困難な例が生じてしまう結果になったわけである⁹。

- (60) Hir forheed shoon as **bright** as any day

——*Ibid.*, I. 3310.

副詞の歴史的変遷

③のタイプの副詞，例えば，frendlice も副詞接尾辞 -e を失い，frendlic となり，形容詞の frendlic と形態上まったく見分けがつかなくなった。そして，treweliche の方も副詞接尾辞を失い，結果的には形容詞の trewelich と同じ形をもつことになってしまった。この大きな変化が Chaucer の時代に起こり，Chaucer の時代に存在した brighte, bright, treweliche, trewelich, trewely という副詞は，約200年後には，bright のタイプと brightly のタイプになってしまい，両者が自由に使われすぎたために，混乱を引き起こし，それが現代英語まで引きずられてきているのである。

その他，Shakespeare で使われていた -ly 接尾辞をもつ強意副詞 (dearly, exceedingly, throughly, etc.) は，Spenser でも使用されていなかったが，同様，Chaucer でも使用されていない。

それに対して，Shakespeare や Spenser でも見られた現在分詞の強意的使用 (exceeding, passing) は，Chaucer では passing が ‘extreme’ の意味の形容詞として使用されているのみである。

(61) And of my wyf the passing crueltee.

——*The Merchant's Tale*, l. 1225.

さらに，Shakespeare で ‘somewhat’ の意味で使われていた副詞 something の使用は，Spenser でも Chaucer でも見られない。

これに対して，‘not ...at all’ という強意の意味で使用された副詞 nothing は，Shakespeare でも Spenser でも頻繁に使用されたが，Chaucer の時代にもすでに使用例が見られる。

(62) The goute lette hire **nothyng** for to daunce,

——*The Nun's Priest's Tale*, l. 74.

この強調の意味をもつ nothing の用法は古く、*OED* によれば1122年のものが初出の例であるから、それ以来、Chaucer, Spenser, Shakespeare そして現代英語へと受け継がれてきている。

お わ り に

基本的には、now, soon, then などの本来の副詞を除けば、ほとんどの形容詞が -ly の副詞接尾辞を付加し、現代英語における副詞を形成している。これまで見てきたように、副詞接尾辞 -e を消失したために副詞と形容詞が形態上同じになってしまったために生じている混乱も見えてきた。

ここで、これまで述べてきたことから分かってきたことを整理してみよう。

1. -ly の副詞と Flat adverb の意味が同じものは、ぞんざいな口語や俗語 (loose colloquial and popular speech) の場合を除けば、-ly 接尾辞をもつ副詞の方が好まれる傾向にある。すなわち、“The sun shines **bright**.” はもちろん使用されているが、どちらかと言うと “The sun shines **brightly**.” の方が一般的に受け入れやすいし、実際受け入れられている。最近出版されたイギリスの小説では brightly だけが使用されている。

Dumbledore's silver hair was the only thing in the whole Hall that shone as **brightly** as the ghosts.

—*Harry Potter and the Philosopher's Stone* (p. 91. 11. 20-21.)

2. 特によく知られている慣用句や（交通）標識などでよく使用されている Flat adverb はそのまま残る。

Take it **easy**. / **fast** asleep / **wide** open / **dead** tired /
play **fair** / speak **soft** / speak **loud** etc.

If **needs** must, ... (「どうしてもせざるをえないなら, ……」)

...if I remember **right** (「記憶が正しければ, ……」)

Go **slow**. / Drive **slow**.

——Quirk *et al.* pp. 445-447, *Random House English-Japanese Dictionary*.

3. 強調意味をもつ Flat adverb もすぐに廃れることはないだろう。特に, Flat adverb は, 「迫力があり, 意志が強く, きびきびとかつ, 生き生きとした感じを与える」効果を生み出している。そのために, 単音節 (monosyllabic) の Flat adverb が一般的に使用される。

The enemy is advancing. Stand **firm**.

——Close, p. 576.

School begins at nine **sharp**.

I **clean** forgot to call her.

命令文においては特にそうである。

Come **right** here.

単音節 (monosyllabic) でなければ, つぎの例のように Flat adverbs が使えない場合も生じてくる。

*He acts **different** now.

Cf. He acts **differently** now.

4. 特にアメリカ英語においては, 「くだけた会話 (Informal Speech)」において, Flat adverb が頻繁に使用される。普通の会話においては, -ly 接尾辞をもつ副詞が使用される。

That's **sure** kind of you. (=That's **surely** kind of you.)

awful good, **clear-cut** feature, **mighty** helpful, **new** comer,

plain silly, **real** nice, **pretty** good, **terrible** cold, etc.

——Quirk *et al.* p. 446.

5. 会話と同じように, アメリカ英語の作品の中にも, Flat adverb がよく登場する。例えば, Sidney Sheldon の冒険小説, *The Master of the Game*

の中においても Flat adverb が登場し、きびきびとした臨場感を醸し出す効果をあげている。いくつか例を拾い出してみよう。

The biggest diamond in the world had been found there, lying **loose** in the sand, ... (p. 9. 11. 18-19.)

“Open it **half-way**. Hurry!” (p. 58. 1. 10.)

“Hold **tight!**” Jamie warned. (p. 58. 1. 15.)

The raft was suddenly lifted **high** in the air by an enormous wave and hurtled toward the rocks. (p. 60. 11. 18-20.)

He peered **closer**. *Yes, he's a McGregor, all right.* (p. 121. 11. 6-7.)

Now that I know where you are, I'll breathe a lot **easier**, believe me. (p. 158. 11. 5-6.)

Dominique stopped **dead** when she saw Tony. (p. 261. 11. 15-16.)

“Forget it, Kate. They caught me **fair and square**. Now I've got to get away **fair and square**. (p. 268. 11. 1-3.)

“I've heard a lot about your place, Mrs. Blackwell. I'd **sure** like to see it. (p. 276. 11. 6-8.)

The Count stopped **dead** in the middle of the sentence. (p. 345. 11. 12-13.)

Dr. Webster sat there, **silent**. Finally he said, ... (p. 390. 1. 20.)

本来の副詞を除けば、形容詞から派生されたり、形容詞と同じ形態をもつために、副詞が形容詞的用法を備えたり、逆に形容詞が副詞的に使用されたりするために、副詞と形容詞の境界がはっきりしないものが生じている。それは歴史的な起源によるものであったり、発達過程での変化によるものであったり、さらに、慣用的に過去から継続されていたり、人間の感情やその場の状況をより正確に表現するための手段だったり、意識的に正用法 (-ly 接尾辞の副詞を使うのが普通のところに) を避けて、受け入れにくい (Flat adverb を使用する) 表現を使い強調を意図したりすることによるのである。

副詞の歴史的変遷

注

1. 現代英語において、after が副詞で用いられるのはまれで、afterwards を代わりに使用するのが普通である。

He worked in Sweden until 1950, and *afterwards* in Germany.

2. この once は、元々 OE (Old English) **ānes/ones**:an/on 'one'+es であった。したがって、Chaucer の時代にも、スペリングは OE のものがそのまま受け継がれて ones (cf. twies, thries) であったが、語尾が無声化したために現在のスペリング once (cf. twice, thrice) になった。
3. このように -ly 接尾辞をもつ副詞が対になって登場する場合、どちらか一方の副詞が -ly 接尾辞をもたない形（表面上は形容詞と同じ形）をとるのが一般的である。
4. 現代英語における「ことわざ」でのもう一つの例。

Handsome is that **handsome** does.

(=Handsome is he who does handsomely.)

5. このことは現代英語における '**nice and** ~' という表現と似ているところがある。この表現は **nice and** の次にくる形容詞や副詞の意味を強めて、「非常に～である」、「申し分なく～」という強調された意味合いをもつ。

He's **nice and drunk**. (ひどく酔っ払っている)

Clean the pots **nice and bright** now. (ぴかぴかに)

——*Random House English·Japanese Dictionary* (p. 1731.)

6. *OED* には、1818年より後の1840年の例文も掲載しているが、これはおそらく文体上 (-ly の語尾をもつ語を並べる) の理由から使用されているだけで、本来なら hard が使われたはずである。

What is made is slowly, **hardly** and honestly earned.

——*OED*. Vol. V. p. 89.

7. Spenser の *Faerie Queene* からの例文はすべて Sugden から借用したものである。
8. 現代英語において、この例文に登場する sore が副詞として使用されるのは、“sore pressed” とか “sore afraid” という成句を除いて非常にまれで、sorely が副詞として普通である。
9. 一般的に、Shakespeare の時代は、-s 語尾が普通になっていったわけであるが、同時代の作家たちの技巧を凝らせた散文には、-eth 語尾が非常に多い。し

かし、詩においては、短い語尾 -s の方がはるかに多く用いられている。

参 考 文 献

- Araki, K. & Ukaji, M. 1984. *A Short History of English, III A*. Taishukan. Tokyo.
- Bradley, H. 1971. *A Middle-English Dictionary*. Oxford University Press. London.
- Brunner, K. (Tr. Kuriyagawa, F.) 1971. *Abriss Der Mittel-Englischen Grammatik*. Kenkyusha. Tokyo.
- Burnley, D. 1989. *The Language of Chaucer*. Macmillan. London.
- Close, R. A. (Tr. by Tamura, K. & Naito, K.) 1992. *A Reference Grammar for Students of English*. NCI. Tokyo.
- Curme, G. O. 1974. *Syntax*. Maruzen Company Ltd. Tokyo.
- Davis, N. 1981. *A Chaucer Glossary*. Oxford University Press. London.
- Delbridge, A. ed. 1991. *The Macquarie Dictionary*. The Macquarie Library Pty Ltd.
- Ellit, R. W. V. 1974. *Chaucer's English*. Andre Deutsch. London.
- Hinckley, H. B. 1970. *Note on Chaucer*. Haskell House. New York.
- Kerkhof, J. 1982. *Studies in the Language of Geoffrey Chaucer*. Leiden University Press. Leiden.
- Mustanoja, T. F. 1985. *A Middle English Syntax*. Meicho Fukyu Kai. Tokyo.
- Murray, et al. 1970. *The Oxford English Dictionary*. The Clarendon Press. Oxford.
- Nakao, T. 1972. *History of English II*. Taishukan. Tokyo.
- Oizumi, A. 1991. *A Complete Concordance to the Works of Geoffrey Chaucer*. Olms-Weidmann. Hildesheim.
- Otsuka, T. 1976. 『シェイクスピアの文法』 Kenkyusha. Tokyo.
- Quirk et al. 1985. *A Contemporary Grammar of the English Language*. Longman. London.
- Random House English-Japanese Dictionary*. 1980. Shogakukan. Tokyo.
- Robinson, F. N. 1974. *The Works of Geoffrey Chaucer*. Oxford University Press. London.
- Rowling, J. K. 1997. *Harry potter and the Philosopher's Stone*. Bloombury. London.
- Sandved, A. O. 1985. *Introduction to Chaucerian English*. St. Edmundbury Press. London.
- Sheldon, S. 1988. *The Master of the Game*. Academy Shuppan. Tokyo.
- Skeat, W. 1972. *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*. Oxford University Press. London.

副詞の歴史的変遷

- Sugden, H. W. 1958. *The Grammar of Spenser's Faerie Queene*. (Tr. by Masui) Kenkyusha. Tokyo.
- Sweet, H. 1968. *A New English Grammar: logical and historical*. Part I, Part II. The Clarendon Press. Oxford.
- Tatlock, J. S. P. & Kennedy, A. G. 1963. *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer*. Peter Smith. Gloucester.
- Yagi, R. 1955. 『副詞・接続詞・間投詞』 Kenkyusha. Tokyo.
- Yasui, M. et al. 1976. 『形容詞』 Kenkyusha. Tokyo.
- Zachrisson, R. E. 1958. (Tr. by Maejima) 『シェークスピア・聖書の語法』 Kenkyusha. Tokyo.

A Transition of ‘Independent Adverbs’ from Present-day English, through Shakespeare’s, Spenser’s and Chaucer’s English, to Old English

NOHARA, Yasuhiro

Traditionally people usually recognize adverbs by the commonest suffix –ly: *absolutely, abruptly, absently, accurately*, etc. There are many adverbs, however, which are not recognizable in this way: *indeed, now, often, soon*, etc. And there are also a lot of adjectives which have the same suffix –ly (which is called ‘adjectival –ly’): *brotherly, friendly, ugly, weekly*, etc. And some adverbs have two forms, each of which has a different meaning: *dear/dearly, hard/hardly, late/lately, near/nearly*, etc. Some other adverbs have two forms as well, which have the same meaning: *bright/brightly, deep/deeply, wrong/wrongly*, etc. Bright and brightly, for example, may be alternatives in the following sentence.

The sun shines bright/brightly.

In addition to these adverbs, there exist some adverbs, which cannot be replaced with other –ly adverbs at all.

I clean forgot to call her.

*I cleanly forgot to call her.

I wonder how we can explain this difference.

In this paper, I will investigate a transition of Independent Adverbs, tracing them historically, from Present-day English, through Early Modern English (W. Shakespeare’s and E. Spenser’s) and Middle English (G. Chaucer’s), to Old English.